

目的) 米国から1905年に伝道師として来日したウィリアム・メレル・ヴォーリス(William Mevrell Voris・1880～1964)は建築家としても多くの業績を残した。キリスト教と建築設計は互いに結びつき人々に洋式生活を教えた。ここではその成立過程及び、そこに携わった人々の生活行動、意識を明らかにすることとした。

方法) 関連資料、文献の調査、分析、及び関係者へのヒアリングによる。

結果) ヴォーリスが「近江ミッション」を設立し、また近江兄弟社へと事業を拡大する時の最大の貢献者は吉田悦蔵であった。この2人を含むミッションは、キリスト教的使命感から生活改善に積極的で、洋式生活を様々に導入した。ヴォーリスは住宅の設計を通してこれを説き、ミッションの女性達は生活を通してこれを伝えた。吉田悦蔵の妻、清野は自分の信念を具体化するべく1933年10月に近江八幡の地に家政塾を開いた。最初は、教会の婦人会と協力しての料理講習会で、吉田邸で開催されていたが、次第に生徒も増えたことから隣地に木造平屋建・約40坪の本館が建設された。教授内容は修身、手芸、料理、洋裁、英語、音楽等で時間割が組まれ、近郊の若い女性達でにぎわった。その当時、この地近江八幡はまだ座式台所も多く、ほとんどの生徒は、家政塾で初めて立働式の台所作業を経験した。また西洋の合理的な生活様式、洋式マナー、エチケットなどが教えられ、それらはやがて彼女達の家庭に持ち運ばれていった。現在では、同じ食卓での共食は、ごく普通に見られる光景であるが、当時ではごく珍しいことであつたであろう。様々な統制が強まってゆく中で家政塾は1942年夏、突如閉鎖され、再建されることはなかった。